

モーツァルト

聖歌隊によって、モーツァルト作曲の讃美歌が歌われました。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、18世紀オーストリアの音楽家です。生涯に900曲以上の作品を生み出してきました。神童と呼ばれた人です。

モーツァルトは亡くなる3年前、32歳の時にこのように語っていたそうです。

「ヨーロッパ中の宮廷を周遊していた小さな男の子だった頃から、特別な才能の持ち主だと、同じことを言われ続けています。目隠しをされて演奏させられたこともありますし、ありとあらゆる試験をやらされました。こうしたことは、長い時間かけて練習すれば、簡単にできるようになります。ぼくが幸運に恵まれていることは認めますが、作曲はまるっきり別の問題です。長年にわたって、僕ほど作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた人は他には一人もいません。有名な巨匠の作品はすべて念入りに研究しました。作曲家であるということは精力的な思考と何時間にも及ぶ努力を意味するのです」

私は、モーツァルトという人に、努力や研究という言葉は合わないと思ってきました。まさしく天才で、何の苦もなく名曲を次々生み出していったかのように思っておりました。しかし、研究と思考と努力が重ねられていたのです。そして、多くの人から嫉妬されながら、死んでいったのがモーツァルトという人だったのかと思います。

モーツァルトが作曲した曲が、今日、神様を賛美する歌としてささげられるのです。私たちもともに「いと高き主にみ栄えあれ」と賛美をささげる恵みを味わいたいと思います。

人が生きていく中で、神様の姿が見えないという思いにさせられる時があります。その中で、私たちは、幸いな時、悲しみの時、人を生きるものとしてくださる方を信じて賛美をささげるのです。

アテネでのパウロ

アテネの町に、「知られざる神に」という祭壇がありました。神様は、自分たちの生活とは遠く離れているわからない神であるということの表れだったのではないかと思います。

アテネは一大文化都市です。学問、文化、芸術が発達し、人間が持つ力を最大限に表現しようとする気風にあふれたところでした。神は、知られざる神、遠く離れた神であって、いちいち自分たちの生き方に干渉してくるものであっては困るということであったかもしれません。

しかし、パウロは、私たちの神は知られざる神ではない。すべての民族を造り出し、季節を定め、人が住むところを定められる方であると語ります。

さらに、パウロは、イエス・キリストの十字架の死と復活によって、神様がこの世を裁かれる日があると語ります。それはまさしく、あなたはどこにいるのか、あなたはどのように生きるのかと問いかけてくる出来事でした。

アテネの人々は、それを聞いて、「それについては、いずれまた聞かせてもらおうことにしよう」とあざ笑ったのです。文化、学問、芸術について、自分のあり方を守ることに、経済の発展という自分たちのあり方を守ることに、アテネの人々は頑なでした。自分たちがこの世を思うようにしているのです。この世は自分たちのものであると考えているのです。

しかし、パウロは、この世を作られたのは神様であり、この世のさまざまな事柄を見ることを通して、神様を示されているのだと語りました。私たちがこの世を自由にするのではなく、私たちは神様の中に

生かされ、それぞれの時を与えられているのです。

「世界とその中の万物を造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。」（24～25節）

神様には不足はないのです。私たちが何かしてあげなければならないということはないのです。

ソロモンが神殿をささげたときの祈りを思い起こします。

「神は果たして地上にお住いになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください」（列王記上8章27節以下）

ソロモンは、どのようにすばらしい神殿を建てても、神様が住まわれるところとしてはふさわしくないと言ったのです。ただ、私の祈りをきいてくださいと祈ったのでした。

神様は何も不足しておられないのです。そして、すべての人に命と息と、すべてのものを与えてくださるのです。私たちはただこの神様をたたえ、賛美をささげるのです。神様は私たちにどのように生きるのかと問いかけてこられます。この問いかけを聞きながら、私たちのなすべき業に努めるのです。

私たちはどう生きるのか

第二次大戦の時期に、ナチス・ドイツが行ったユダヤ人を中心とする多くの人々に対する迫害をホロコーストといいます。

「ホロコーストは人間が人間に対して犯した罪である。人間が人間に対して犯した罪の償いや癒しは神がなすべき仕事ではない。神がその名にふさわしいものなら、必ずや「神の支援なしに地上に正義と慈愛の世界を打ち立てることのできる人間」を創造されたはずである。自力で世界を人間的なものに変えることができるだけ高い知性と徳性を備えた人間を創造されたはずである。」

内田樹「現代における信仰の形」

人が犯した残虐な行為、その責任を神様に負わせることはできません。神様は、自分たちの力でこの世に正義と愛に満ちた世界を打ち立てることのできる人間を創造されたはずだといわれるのです。

ホロコーストは70年以上前の出来事ですが、この世界では、今も、多くの人々の血が流されています。人が生きる権利が踏みにじられています。性暴力によって苦しめられている人がいます。たくさんの子どもの命が失われ、脅かされています。この世界をどう生きるのかと神様は問いかけておられるのです。

アメリカ、ボストンのある学校で核戦争が起こる可能性についてのアンケートが行われました。その学校では一人の子どもをのぞいて全員が、核戦争によって世界の終わりは近いと考えていたそうです。一人だけ違う答えをした子どもがいました。その子どもに、なぜあなたは核戦争は起こらないと考えているのかとたずねました。すると、その子どもは、「だって、パパとママがそれに反対して働いているから」と答えたということです。

自分ひとりの力など意味がない、何の役にも立たないと思ってしまうかもしれません。しかし、それがなくなってしまうたら、もう希望はなくなってしまうのです。私たちは喜びのときも、悲しみのときも歌を歌います。「いつまで、主よ、わたしを忘れておられるのか。いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか」（詩編13）詩編の中には、苦しみの賛美、嘆きの賛美があります。

今日、追悼の祈りをささげます教会の先達たちも、幸いな時、困難な時、賛美をささげ続けてこられたのです。一人ひとりにできることは、小さなことかもしれません。その私たちが、心からの喜びの歌をささげることのできる日を望み見ながら歩むものでありたいと願います。